

現象文とその周辺

井上和子

神田外語大学

話し手の感覚や感情を直接に表出する感覚文と話し手の直接の感覚や知覚を表現する現象文の述語語尾の「る」が現在時制辞の「る」と異なる特徴を持つことに着目し、この「る」を語尾とする述語を述語の原形(*root form*)と仮定し、これらの文の統語上、意味上の特徴の解明を試みた。そして、原形述語を持つ感覚文と現象文を独立文として成立させる条件について考察し、補文標識句(*CP*)の機能範疇であり、文型を決定する *Force Phrase* の存在が唯一の条件であるとの結論に至った。^{*}

1. 序

言語には、感覚、感情、知覚などを直接に表現する文と話し手の判断を加えて表現する文の二つの型がある。Kuroda (1972)¹では、前者を *thetic judgment* (話し手の状態) を表わす文、後者を *categorical judgment* (事実を示す) 文として区別している。益岡(2000)も、これを情意表出型と演術型として扱っている。これらの他に、この点に言及した論考は決して珍しくはない。本論文では、*thetic judgment* を表す文を感覚文、*categorical judgment* を表す文を陳述文と呼ぶ。下記(1)

^{*} 本論文の内容について、神田外国語大学言語科学研究センターのゼミにおいて発表し、種々のコメントを得た。中でも遠藤喜雄氏から *CP* の内部構造に関して多くの貴重な教示をいただき、本論文作成に当たって大いに参考になった。もちろん、この問題にたいする理解の足りない点や誤解があれば、それらは筆者が責めを負うものである。

はそれぞれの例文を示したものである。

- (1) a. あー、寂しい。 (感覚文)
b. 今日は論文の締め切り日です。 (陳述文)

しかし、以上の区別を統語構造として如何に表示するかについての考察は、筆者の知る限り益岡が情意表出型の文を命題レベルの構造として考察の対象にしているのが唯一のものである。

本研究は(2)に示す問題意識が動機になって感覚文と話し手の直接の知覚や感覚を表す現象文の分析を進めたものである。

- (2) a. 言語研究において、述語の定形によって、文が独立文²として認定されるという考えが古くから保持されてきた。日本語研究でも日本語述語の活用語尾の終止形のみが独立文を成立させる役目を果たすものとされてきた。ところが、日本語の文の中には定形を持たずに独立文として認定されているものがあるのではないか？
- b. 生成文法理論においては、時制辞句(Tense Phrase: TP)の上に補文標識句(Complementizer Phrase: CP)を仮定し、疑問詞句の移動先を CP に求めた。しかし、定時制辞を主部とする TP の上に CP が存在して初めて独立文ができるという基本的な考えが生かされなかった。その結果英語などの研究からは CP にかんする掘り下げた研究がなされなかったのではな

¹ 本文中に引用する文献は、原文が英語の場合は英語名、日本語の場合は日本語名で示す。

² 一般には従属文も独立文も「文」としての資格を持つものとされているが、本論文では独立文として成立するかどうかの問題になる箇所では、混乱を避けるために「独立文」の用語を用いる。

いか？

- c. Rizzi (1997)などにより CP の内部構造に関する研究が進んでいるが、CP が独立文の成立に如何に関与するのか？

以上の問題意識は Kuroda (1972)の「話し手の状態を表わす文」(感覚文)と話し手の直接の知覚や感覚を表わす文(現象文)に現れる動詞の「る」形と形容詞の「い」形(以後まとめて「る」形と呼ぶ)は現在時制辞の「る」とは異なる特徴を持つという観察から生まれたものである³。益岡(2000)もこれについて論じている。

例えば(3)は現象文の例であるが、これらの「る」形は状態述語はもとより、動作述語の場合でも現在時を表す。(4)に示すように、一般の場合は動作動詞の「る」形は、未完了または未来を表す。

- (3) a. 近所が騒がしい。
b. 夕焼けが美しい。
c. 魚を焼く匂いがする。
e. あ、トラックが来る。
f. あ、切符が無い。
- (4) a. もう少しで湯気が上がる。(未来)
b. 索引を作る前に、読み直そう。(未完了)
c. 後 10 分でバスが来る。(未来)

現象文などに見られる「る」形が時制辞でないとしたら、時制辞を持たないこれらの文が如何にして独立文として認められるかという問題意識(2a)が出てくるのである。

本論文では、感覚文と現象文を直接描写文と呼び、陳述文

³ 本論文で用いた資料の中に井上(1973、1977)からのものがある。これらの内容の中にも新しい理論的基盤に立って吟味し、採用したものも少しはある。

と区別した上で、問題意識(2a-c)についてミニマリストプログラム(以後極小プログラムと呼ぶ)の枠組みを用いて論じる。

第2節では、感覚文と現象文の特徴について述べる。第3節では、Miyagawa (2005)が統語構造生成の基本原理の1つとして用いている拡大投射原理(Extended Projection Principle: EPP)を概説し検討した上で、感覚文と現象文の生成とEPPの関連を検討する。第4節では、これらの文を独立文として確立するのには、CP領域が深く関わっていると仮定し、感覚文と現象文の特徴((i) – (vi)の解明によって上記の仮定を検討する。

2. 直接描写文：感覚文と現象文

感覚文には、(i)「寂しい」「悲しい」「なつかしい」など感情を表わす形容詞、(ii)「痛い」「痒い」「暑い」「疲れた」「見える」「聞こえる」など感覚を表現する形容詞または動詞、(iii)「感じる」「思う」「考える」など知覚を表わす動詞、(iv)「ーたい」「ーてほしい」など願望を表わす形容詞などが用いられる。

感覚文の特徴は、(i) 1人称主語のみを許容し、これを表出しない。(ii) 例文(1a)のように、述語は心理述語と感覚述語が主として用いられる、(iii) 述語語尾は「る」形を取る。

他方、現象文は、話し手の現象にたいする直接的な知覚を表わす。その特徴は、(iii) 述語語尾は「る」形を取る、(iv) 1人称、2人称主語は許容せず、3人称主語のみを取る。ただし、これら2種類の文に用いられる「る」形は、先にも述べたとおり(v) 現在時制の「る」とは異なる特徴を持っている。

直接描写文は、話し手の発話内容に対する判断、すなわち「断定」「推量」など(Kurodaの categorical judgment)を表わす文とは本質的に異なるもので、(vi)「主題－説述」(theme-rheme)の関係を表わさない。

3. 拡大投射原理と統語構造生成

Miyagawa (2005)では、統語構造生成の基本原理の1つとして拡大投射原理が仮定されている。投射の原理とは、論理形式(Logical Form - LF)、深層構造(Deep Structure)、表層構造(Surface Structure)の各統語レベルの表示は、語彙項目に与えられた選択制限に従って、語彙項目から投射されるものとするというものである。この原理に「すべての句(clause)は主語を持たなければならない」という条件が加わったものが拡大投射の原理(Extended Projection Principle - EPP)である。

次節で示す Miyagawa (2005)の分析では、EPP が時制辞句(TP)の主部 T および補文標識句(CP)の主部 C の必須要素であるとしている。まず、3.1 節でこの主張について述べ、3.2 節で EPP を T と C の必須要素とするべきかどうかの問題を扱う。続いて 3.3 節で EPP と直接描写文との関連について検討する。

3.1. Miyagawa (2005)の分析

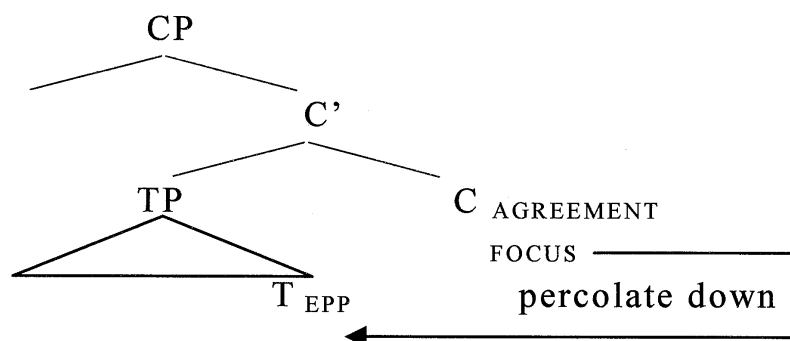
Li&Thompson (1976) は 世 界 の 言 語 を 「 主 語 優 位 (Subject-Prominent)」「話題優位(Topic-Prominent)」「主語・話題優位(Subject-Prominent and Topic-Prominent)」「主語・話題否優位(Neither Subject-Prominent nor Topic-Prominent)」の4つのタイプに分け、日本語は「主語・話題優位」の言語であるとしている。

Miyagawa (2005)⁴ は、この考えを極小プログラムの枠の中に入れ、「焦点優位(Focus-Prominent)」「一致優位(Agreement-Prominent)」という二つの素性による言語の分類を提案している。(1)に示すように C が持つ「焦点」と「一致」の素性の中で前者が T に下がったものが「焦点優位」の言語、後者が T に下がったものが「一致優位」の言語である。日本

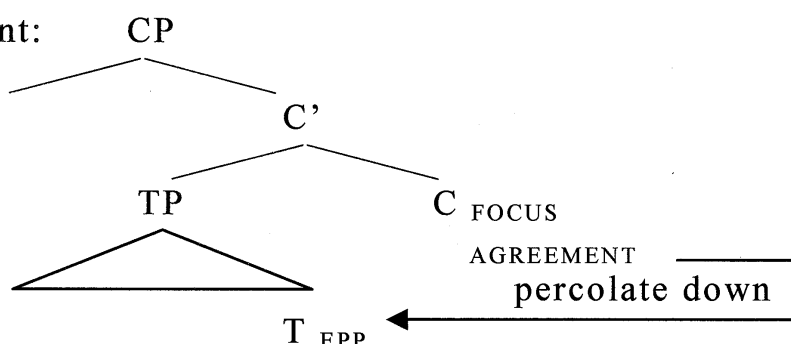
⁴ Miyagawa (2005)は、(2001)および関連の論文の主旨をまとめたものとして、とりあげた。

語は前者、英語は後者である。

(5) a. Focus:



b. Agreement:



(5)では時制辞句の主部 T に EPP が必須要素として与えられている。そして、優位にある素性、すなわち、焦点優位の言語では焦点素性、一致優位の言語では一致素性が時制辞(T)に与えられているが、それと同じ一致素性を持つ要素が時制辞句の指定部(TP-Spec)に引き上げられて照合され、その時制辞の EPP を満たす。他方、優位ではない素性、すなわち前者では一致素性、後者では焦点素性は C に留まっており、これと同じ素性を持つ要素が補文標識句の指定部(CP-Spec)に引き上げられて素性の照合が行われる。

具体的には、英語は一致優位の言語であるから、T に与えられている人称、数、性に関する素性 (Φ素性) と同じ素性を持つ名詞句が、T の EPP により TP の指定部に引き上げられて照合される。他方、焦点優位ではないから、焦点の素性を持つ *wh*-語は CP に引き上げられなければならない。日本語は焦点優位の言語であるから、焦点素性をもつ *wh*-語は EPP を満たすために TP の指定部に引き上げられて、その位

置にとどまるか、あるいは元の位置に留まったままでも、焦点素性が T と *wh*-語の間で一致すればよいとされている。いずれにしても、CP に引き上げられることはない。他方、たとえば「田中さんが議長です」の「が」格主語は、久野(1973)による「総記」(総ての中でこれだけが)の意味を表すが、この「が」格主語は TP の指定部から更に CP に引き上げられることになる。そのためには何らかの一致素性を仮定しなければならないが、本論文ではその点に触れていない。次に問題になるのは、話題の「は」を持つ文と、いわゆる現象文、すなわち談話の前提を持たず文全体が新しい情報を伝達する文と感覚文である。

3.2. EPP は日本語の時制辞の必須素性か？

日本語には、主格名詞句を持たず、主語の機能のある程度果たす「から」や「で」を用いた文が珍しくない。これらの名詞句も EPP によって時制時句の指定部に引き上げることが必要かどうかという問題がある。さらに、基底構造の位置(元位置)に留まっている「が」格主語も存在する。この点からも EPP 素性が必須要素かどうか問われることになる。

3.2.1. 主格名詞句を持たない文

Inoue (1998) は主格名詞句を持たない文を 4 種類に分けて考察している。

- (6) a. 政府から財団に援助金を送った。
- b. 血液センターで血液型シールをお張りします。
- c. 親友さえ彼を裏切った。
- d. 人生って(人生は)常に自分を探す旅みたいなものでしょう。

これらの文の「から、で、さえ、は、(って)」を伴う名詞句は、有生名詞句である限り、再帰形式の先行詞になることが

できるし、目的語に対する尊敬表現を引き出すなど、主語としての機能を果たしている。このような文では、Kuroda(1988)での主張のように主語位置は空であると考えられる。(6a, b)は元位置の主語、(6c)は CP の FocP (焦点句) を形成する要素の一種である限定詞(delimiter)に隠された主格名詞句、(6d)は話題化された主語を持つ文である⁵。これらを見ると、Miyagawa 文法での時制辞に与えられている EPP を、少なくとも必須素性ではなく任意素性とするか、この EPP による引き上げを任意移動とするかという問題が起こる。

上田（2002）は補文に現れる「から格主語」が *vP* 内に存在することを立証する試みである。

(some>every, *every/some)

(some>every, every/some)

d. 加藤さんが/??加藤さんから自分自身を卑下しているのだ。

e. 加藤先生が/??加藤先生からご自分のご著書を紹介なさった。

ないのに対して、「から」格主語にはこの解釈が可能である。これは、「から」格主語が項としての資格を持つがゆえに代名詞を束縛することができると考えられる。これに対し、「が」格主語は非項 (A') の性格を持つから代名詞を束縛することができない。(7c,c')は、「が」格主語は vP の外にあるために、目的語がそれよりも広いスコープを持ち得ないが、「から」格主語は vP 内にあるために主語は目的語にたいして広いスコープも狭いスコープをも持ちうること、(7d,e)は主語認定に使われる、再帰形式の先行詞、主語にたいする尊敬表現の可能性に関して、「が」格主語はこれらの可能性を持つが、「から」格主語にはこの可能性が低いことを示している。

以上は、「から」格主語文に関する限り、EPP は満たされない。したがって、Miyagawa の主張である、T に必須素性として EPP が与えられ、EPP によって時制辞の指定部が何らかの要素で満たされなければならないという考えは成り立たない。

3.2.3. 受動文中の慣用句の目的語

藤巻 (2005) は、受動化によって慣用句の目的語に「が」を与えた場合に、元の位置に留まらなければならない現象を捉えて、日本語の元位置の主語の可能性を主張している。いずれも EPP を義務的に機能させている Miyagawa (2005)などに対する有効な反論である。

- (8) a. 太郎がその事件に口を出した。
b. 太郎によってその事件に口が出された。
c. *太郎によって口がその事件に出された。

3.2.4. EPP について (再考)

以上の日本語からの資料は、EPP は必須素性でないと仮定しなければ説明がつかない。しかし、事実はその簡単ではない。

まず、Miyagawa の枠組みで C に与えられた EPP によって

CP-Spec に話題が引き上げられるとする。これによって「話題－評言」(topic-comment)の関係が成り立つ。同じく EPP によって TP-Spec に引き上げられた主語は「主題－説述」(theme-rheme)の関係を作る。このように考えると、EPP は文の賓述(predication)を担う重要な役割を果たすものとなる。もし総ての文が賓述という機能を果たすのならば、EPP が必須素性であるという仮説が根拠を得る。

しかし、前述のように EPP を必須素性としては困る例として、「が」格主語を持たない文や「から」格主語文がある。「が」格主語を持たない文と「から」格主語文については、「主題－説述」の関係を作らないという仮説を如何に検証するかという問題と、これらの文の主語と述部の関係を如何に捉えるかの問題があるが、これらは今後の解決にゆだねることにする。

3.2.5. EPP と直接描写文

第2節で述べたように、感覚文と現象文の「る」は時制辞の「る」とは異なる特徴を示す。このことは、これらの文の主語は時制辞との素性照合のために時制辞の指定部 (TP-Spec) へ引き上げられておらず、VP または vP 内に留まっているという考えの根拠になる。現象文については、Miyagawa の枠組みでこの点に一応の説明が可能である。すなわち、(5a)で示しているように、日本語は焦点優位の言語であるから焦点素性の照合のために主語が TP-Spec の位置に引き上げられるのである。現象文は話し手の知覚を直接に表す文であるから、談話における前提が無く、したがって焦点の無い文である。そのために、焦点素性の照合ができないから TP-Spec への引き上げが起こらず、現象文の主語は元位置にとどまり、「主題－説述」の関係を表わさないということになる。しかし、こ

の場合も必須要素としての EPP が問題になる⁶。

4. 直接描写文の分析

直接描写文である感覚文と現象文の特徴を以下に再掲する。

(9) a. 感覚文：

- (i) 1 人称主語のみを許容し、これを出さない。
- (ii) 述語は心理述語と感覚述語が主として用いられる。
- (iii) 述語語尾は「る」形を取る。

b. 現象文：

- (iii) 述語語尾は「る」形を取る。
- (iv) 1 人称 2 人称主語は許容せず、3 人称主語のみを取る。
- (v) これら 2 種の文の「る」形は現在時制の「る」とは異なるものである。
- (vi) これらの文は「主題－説述」の関係を表わさない。

本節では、これらの特徴の出自を説明するために(10)を仮定する。

(10) 仮説 1：

感覚文と現象文は、CP 領域において最上位に位置して文のタイプを決める Force Phrase のみを許容し、最下位において文が定形であるか不定形であるかを示す Finite Phrase とも、話題、焦点、修飾節など中間に位置する要素とも共起しない。

⁶ Miyagawa (未公開) “Optionality” は量化詞の作用域の解釈にかんして、EPP の必須要素としての機能を詳細に論じている。筆者の私見では、LF において意味解釈のために機能する義務を負っている EPP が、統語部門でも統語操作に必ず関わらなければならないとは言えない、むしろ EPP の元来の意味である「句には主語があること」という投射原理の拡大が見られない場合を認めるべきではないかと思う。

次の(11)は遠藤(2008)において紹介された Rizzi (2004)による CP の構造である。

(11) CP 領域：

ForceP	TopP	Int	TopP	FocP	ModP	TopP	FinP
文のタイプ	話題	何故		焦点			定形/非定形

(TopP: Topic Phrase, FocP: Focus Phrase, ModP: Modifier Phrase) (ModP は文全体に係る修飾節または修飾句とする。)

さらに、感覚文と現象文の特徴の解明のために次の副仮説群を設ける。

4.1. 副仮説群

(12) 仮説 a： VP は眼前の現象の直接的感知を表出する。

仮説 b： 感覚文は VP 内に留まり、vP への投射は行わない。

仮説 c： 現象文は vP への投射を行い、vP 内に留まる。

仮説 d： 感覚文と現象文に現れる「る」形は原形(root form)であって時制辞ではない。

本節では、上記の副仮説 a-d の当否を検討する。

4.1.1. 仮説 a： VP について

VP は現象を直接的に表出するという仮説 a は、次の予測を伴う。心理述語や感覚述語がその主部として現れれば、話し手の感覚や知覚を表し、一般の述語が使われれば、話し手が知覚する現象を表わすということになる。仮説 a に関連して仮説 b「感覚文は VP に留まり、これらの文では vP への投射は行われない」ことになる。

仮説 a によって、感覚文に 1 人称主語が現れないことにも説明がつく。この種の文の述語が TP の主部 T に引き上げら

れるとしても、TP の指定部には主語が存在せず空であると予測する。事実「疲れた」「寂しい」「楽しい」、「寂しかった」「楽しかった」などの時制文はできるが、この段階でも主語は一般に現れない。それでは、「私は疲れた」のような 1 人称主語は何処から来るのであろうか。詳しい議論は省略するが、結論は、「私は」は対照を表わし、CP の領域の FocP (焦点句) として現れるとするのである。従って、1 人称主語を持つ文は純粋な感覚文ではないことになる。ちなみに、完了時制を持つ「寂しかった」「楽しかった」も感覚文ではなく、陳述文である。長谷川(2008)では、1 人称主語は基底で生成されており、CP の機能範疇である ModP (モーダル句) の指定部に現れた場合に省略可能であるとしている。本論文とは逆の主張である。

仮説 a にたいするもう 1 つの重要な根拠として「る」形と「ーている」形の間に選択制限があることを上げよう。まず、(10)の例文が示すように、感覚文では「ーている」を使うと感覚の表出ではなくなり、「ーがっている」を伴う客観的表現にしなければならない。したがって「ーがっている」文には 1 人称主語は許容されないはずである。

- (13) a. 悲しいなあー。
b. *私は悲しがっている。
c. 太郎は悲しがっている。

このように「ーがっている」文では、予測どおり 1 人称主語は許されない。

(14)(15)の例文では、感覚文のタイプ(iii)に属す「知覚」を表す「感じる」「推測する」などにも「る」形と「ーている」形の間の選択制限が顕著に現れている。

- (14) a. (私は) 一種の気まずさを感じる。
- b. (私は) 一種の気まずさを感じている。
- (15) a. * 学生達は一種の気まずさを感じる。
- b. 学生達は一種の気まずさを感じている。

(14)(15)は、1 人称主語文では「る」形「ーている」形が許されるが、3 人称主語文は「ーている」形でなければならないことを示している。(16)の受動文では能動文の主語が現れていないが、「る」形と「ーている」形の使い分けで主語が一人称か他者であるかが理解される。

- (16) a. 両者の間の交際には、いろいろの摩擦があったと推測される。(1 人称主語)
- b. 両者の間の交際には、いろいろの摩擦があったと推測されている。(他者)

以上のように、感覚文が 1 人称の感覚の直接的表現であるという仮説 a には、十分な根拠がある。

4.2.2. 現象文について

仮説 c と d は、現象文は話し手の直接知覚する客観的現象を表わすものであり、3 人称主語を必要とするという事実を扱うためのものである。これには根拠となる現象がいくつかある。

現象文は感覚や知覚を表わす表現と共起することが多い。以下に(3)を再掲して(17)とする。

- (17) a. 近所が騒がしい。
- b. 夕焼けが美しい。
- c. 魚を焼く匂いがする。
- e. あ、トラックが来る。
- f. あ、切符が無い。

現象文を埋め込んだ(18)の各文の主文の述語は感覚動詞である。

- (18) a. 私は母が書類にサインするのを見た。
- b. 隣で口論する声が聞こえた。
- c. 日本人選手が活躍する有様をテレビで視聴した。
- d. 魚を焼く匂いを嗅ぎつけて、猫がやってきた。

現象文は基本的に「る」形を取るが、これらは、動作の進行相を表す「ーている」形でも現れ、進行相の意味を継承している。

- (19) a. 私は母が書類にサインしているのを見た。
- b. 隣で口論している声が聞こえた。
- c. 日本人選手が活躍している有様をテレビで視聴した。
- d. 魚を焼いている匂いを嗅ぎつけて、猫がやってきた。

このような、埋め込み文の「る」形と「ーている」形が主文と同時を表すのは、一般には見られないことである。

(20a)(21a)の「る」形は原則どおり未来を表し、(20b)(21b)の「ーている」形は進行相を表している。これが一般的な「る」形と「ーている」形の対照点である。

- (20) a. この車は高速道路を走るが、点検は必要だろうか。
(未来)
- b. この車は高速道路を走っているが、点検は必要だろうか。(現在進行相、もしくは習慣)
- (21) a. 明日は会議に出席するから、会場係りに電話して下さい。(未来)
- b. 明日は会議に出席しているから、会場係りに伝言しておいて下さい。(進行相)

4.2.3. 直接描写文における「る」形について

前節で述べたとおり、現象文に現れる「る」形語尾を持つ述語（「る」形述語と略す）には一般の時制の解釈と異なる独自の解釈が与えられる。本節では、4.2.3.1 節で日本語の時制の解釈、4.2.3.2 節で直接描写文に現れる「る」形の解釈を扱う。

4.2.3.1. 日本語の時制の解釈

ここで、日本語の時制の解釈について概説しておこう。現在時制辞の「る」は状態述語では現在の状態を表わし、非状態述語、特に動作動詞では習慣または未来の動作を表わす。

- (22) a. 今日は天気がよい。(現在の状態)
b. 加藤さんはいつも遅くまで仕事をする。(習慣)
c. 学生達は明日体育祭のプログラムを決める。(未来)

「た」形は、状態動詞では過去の状態、非状態動詞では、過去または現在完了、過去完了を表わす。

- (23) a. 昨日は気温が低かった。(過去の状態)
b. 学生たちは、8時に研究室を出た。(過去)
c. ようやく学園祭の後始末が終わった。(現在完了)
d. 研究室を出た学生は、事務室に立ち寄った。
(過去完了)

(23d)では、「出た」が「立ち寄った」時には既に完了していた（過去完了）ことを表わしている。

4.2.3.2. 直接描写文の「る」形述語の解釈

上記の「る」形述語にたいする一般的な時の解釈が次例(24)では成り立たず、「る」形述語が主文の時と同時に起きている事象を表すと解釈される。それに対して、(25)は一般的な解釈が与えられる文である。

(24) 私は、野鳥が巣を作るのを見た。

(25) 会議に出席するために、私は 9 時に家を出た。

(25)では、「会議に出席する」のは「家を出た」時点で未完の、すなわちこの時点での未来の動作を表わし、「家を出た」時と同時の解釈は与えられない。それに対して、(24)には、「見ている時に動作が行われている」という同時としての解釈のみが可能である。「習慣的に巣を作る」「これから巣を作る」という解釈は与えられない。(26)の各文の下線部にも主文の時と同時の解釈のみが与えられる。

- (26) a. 子供たちは、隣で金属を擦る（擦っている）音に悩まされた。
- b. 消防士は、燃え盛る（燃え盛っている）火のなかに飛び込んで、家族を助けてくれた。
- c. 小沢氏の指揮する（指揮している）有様をテレビで見て、感動した。
- d. 私は、隣で秋刀魚を焼く（焼いている）においに悩まされた。

上記(24)(26)の各文の埋め込み文は現象文である。仮説 a の「VP は眼前の現象の直接的感知を表出する」という主張は、これらの文が「音」「有様」「匂い」など感覚表現を用い、しかも主文の動詞も「見る」「悩む」「感動する」など知覚や感覚を表わすものであることによって根拠を得る。さらに、主文の時との同時性についても、TP への引き上げが起こっていないとする仮説 b 仮説 c と、この「る」形は現在時制を表さず、動詞の原形(root form)であるという仮説 d の根拠の一部になる。

さらに、TP への引き上げが起こっていないので、これらの文は主題－説述の関係を表さないという 2 節(vi)の特徴にも

説明がつく。

それでは時制辞を持たないこれらの文がどのようにして独立文として認可されるのであろうか。

4.2.4. 独立文としての 直接描写文

直接描写文の「る」が時制辞ではないという仮説 d が正しいとすると、時制辞を持たない現象文などが如何にして独立文として認可されるのかという問題が残る。それに対して、本論文では、CP の ForceP によって独立文として認可されると仮定している。

Rizzi (1997)によると CP は force-finite system として捉えられ、ForceP と FiniteP の間に如何なる要素も選択されない場合は、force-finite が一つの統合主部として表出されるとしている。これにたいして、TopP と FocP が選ばれれば、4 節の (11)に示したように、ForceP と FiniteP に分化し、これらの間に TopP と FocP が位置することになる。

FiniteP には[±finite] ([±定形]) という素性が与えられている。この素性がプラスの値を取った場合に、文が独立文として認可されるのである。*finiteness* (定形性) は、時制辞句 (TP) の主部 T (時制辞) から引き継いだものである。

時制辞によって定形か不定形かが決まり、定形文が独立文としての資格を得るという原則は言語一般に当てはまる一般則である。この一般則が当てはまり、疑問文、命令文など文のタイプが ForceP によって決められる言語については、これは問題のない考えである。それに対して、日本語には上記の一般則は平均的な文には当てはまるものの、文のタイプはモーダル要素によって決定される。本節ではそのメカニズムの説明のために、4.2.4.1 節において日本語のモーダルについて概説した上で、4.2.4.2 節で現象文など直接描写文が独立文として認められるメカニズムについて述べる。

4.2.4.1. 日本語の真正モーダル

モーダルには、話し手の発話内容に対する認識（推量、断定など）を表す認識モーダルと、話し手が発話伝達の態度を示す発話伝達のモーダルがある。形式上は、一般に擬似モーダルと真性モーダルの区別がある。日本語について言えば、「のだ」「そうだ」「らしい」などが、擬似モーダルである。井上(2007)では、これらを述語の一種と仮定して、その根拠について詳述している。本論文で問題になるのは、真正モーダルである。真性モーダルはすべて TP の上の CP 領域に属し、認識モーダルと発話伝達のモーダルを擁する。その構造については、4.2.4.2 において示すが、本節では日本語の真性モーダルの特徴と構造について述べる。

日本語の真正モーダルの特徴を(27)に挙げる。

- (27) a. 発話伝達のモーダルが範疇として独立しており、認識モーダルと区別される。

認識モーダル：

「だろう、(し) よう、(する) まい」など。

発話伝達のモーダル：

「(し) ろ、(して) 下さい、(する) な」など。

（英語では発話伝達のモーダルとしては、tag question と呼ばれる *isn't it, aren't you, don't they* などを挙げるができるかもしれないが、主として疑問文、命令文のように、特別の文型があり、モーダルの使用はほとんど無い。）

- b. 真正モーダルは 1 つの文に 1 つしか音形をもって現れない。

「*この山に登ろうまい。」

（まい＝意思）（*認識・認識）

「*明日は大学に行こうな。」

(な=禁止) (*認識・発話伝達)

- c. 発話伝達のモーダルは、主文に1つだけ必ず現れる。補文に現れることはない。認識モーダルで終わっているように見える文もゼロの発話伝達モーダルが存在すると仮定する。例えば、「太郎が走るだろう」という文には下記のモーダルが用いられているとするのである。

「太郎が 走る だろう Ø」

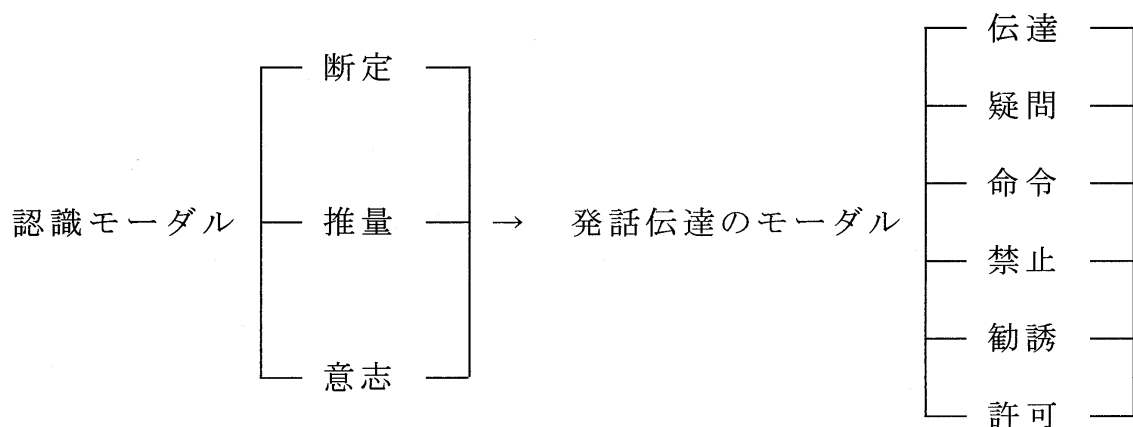
認定 推量 伝達

- d. 埋め込み文には認識モーダルが現われることがある。他の真正モーダルは引用節を除く他の埋め込み文には許容されない。
- e. 日本語の真正モーダルには時制の分化がない。

(28) 日本語の真正モーダルの構造

主文述部の1部+時制辞		
願望	否定	「る」「た」(認定)

→



認識モーダルは話し手の発話内容に対する認識を表わし、発話伝達のモーダルは聞き手に対する話し手の働きかけを表わす。言い換えれば、前者は話し手に直接に依存し、後者は聞き手に依存するということになる⁷。

(28)が一般の日本語文の持ちうるモーダル構造である。特に、発話伝達のモーダルは独立文が必ず取らなければならないモーダルである(27c)。しかし、現象文などはこれらのモーダルを全く取らないと仮定しているのである。時制辞の欄に付した「認定」は、時制辞にも命題内容を認定するというモーダルの意味が存在すると仮定したものである。直接描写文が時制辞を持たないという本論文での仮定では、認定のモーダルをも欠いていることになる。そこで問題になるのは、直接描写文が如何にして独立文として認定されるかということである。

4.2.4.2. 直接描写文を独立文として認めるメカニズム

伝統的な日本語文法でも、アメリカ構造主義の日本語文法においても、定時制辞(*finite tense*)が存在して始めて独立文が成立するという一般則の立場を取ってきた。日本語研究においても「話し手の状態」を表わす(*thetic judgment*)文(感覚文)についての言及はあったが、統語構造としての特殊性は看過されてきた。この考えでは、直接描写文に見られる「る」形も時制辞として扱う他に方法が無かった。

直接描写文の「る」形は原形(*root form*)で時制辞ではないという仮説 d が正しいとすると、時制辞を持たない現象文などが如何にして独立文として認可されるのかという問題が残る。それに対して、本論文では、CP の *ForceP* によって独立文として認可されると仮定しているが、これには以下のような問題がある。

⁷ ここまでの「日本語の真正モーダル」にかんする記述は、井上(2007)から引用し、修正

Rizzi (1997)によると CP は *force-finite system* として捉えられ、TopP と FocP が選ばれて始めて、ForceP と FiniteP が CP 構造の両端に位置し、その間に TopP と FocP が現われ、4 節の(11)の構造が CP に与えられる。TopP と FocP が選択されなければ *force -finite* が一つの統合主部として表出されるとしている。

FiniteP には[±finite] ([±定形]) という素性が与えられている。この素性がプラスの値を取った場合に、文が独立文として認可されるのである。ところで、*finiteness* (定形性) は、時制辞句 (TP) の主部 T (時制辞) から引き継いだものである。

このように時制辞によって定形か不定形かが決まり、定形文が独立文としての資格を得るという原則は言語一般に当てはまる一般則である。

直接描写文の「る」形は原形(*root form*)で時制辞ではないという本論文の立場では、これらは時制辞を持たないので、時制辞による独立文としての認定は不可能である。また、*force-finite* を統合体として捉える Rizzi の考えでは、ForceP のみを選ぶこともできない。その意味で直接描写文は Rizzi の CP 構造にも問題を提起するものである。

文のタイプの選択の可能性は ForceP によって示されるというのが Rizzi の主張であるが、日本語では文のタイプは発話伝達のモーダルによって決定される。しかも発話伝達のモーダルの存在は一般文の必須要件である。すなわち、ForceP と FiniteP との間にモーダルが介在することが一般的法則である。ところが、感覚文と現象文は感情や感覚の直接の表出であって伝達意図によるものではない。したがって発話伝達のモーダルを欠いているという考えは事実合っている。た

を加えたものである。

だし、ForceP は文のタイプをきめるのみではなく、独立文を認定する役割をも持つものと拡大解釈しなければならない。

以上のように、問題意識(2a)の「日本語の文の中には定時制辞を持たずに独立文として認定されているものがあるのではないか？」に対しては肯定の答え、問題意識(2b)については深く論じなかったが、定形述語（日本文法での「終止形」）を持つことが文の成立を保障する英語では、CP 領域の研究は話題、焦点など文一文法の周辺的なトピックとして扱われがちであったことは確かであろう。ただし、Minimalist Program では、統語構造の重要な単位である phase には CP と v P が加わり、TP が外されている。これは、言語現象を広く捉えた的確な判断である。問題意識(2c)については、本論文の中心課題としてその解決を提案した。

4.3. 残された問題

問題として残るのは、感覚文と現象文の「る」形が発話時、すなわち現在を表し、動作動詞にかんしても未完了相を表さない点の説明である。4.2.3.1 節で述べたとおり、状態述語の「る」形は現在の状態を表わす。そこで、「る」形に固有の意味は発話時と同時、すなわち現在であると考え。現象文などに見られる原形(root form)の「る」形もこの固有の意味を備えているとする。この「る」形と状態動詞の一種である「ーている」形の交替現象もこの考えを支持するものである。そして、動作動詞の「る」形に与えられる未完了の意味は、動作動詞が相（アスペクト）に関する素性を備えておりこれに基づく派生的な解釈と考えることができる。

5. 結論

一般に定時制辞によって文が独立文として認定されるという考えが通用してきたが、感覚文と現象文という話し手の感情や感覚、知覚を直接に表現する文を分析することにより、文-

文法の中で CP 領域の果たす役割が大きいことを示す一助とすることができた。TP 内で決定される主題—説述関係を、これまで独立文成立の主要条件とし、TP 領域に閉じこもっていた文法論に、新しい観点を加えることが出来たとすれば幸いである。本論文では議論を日本語分析に集中したが、他言語にも当てはめて本論文で提出した仮説を検討しなければならない。

参考文献

- 遠藤喜雄 2008. (未公刊)「話し手と聞き手のカートグラフィー：南(1974)との接点」
- 藤巻一真 2005. 「日本語の 3 項動詞の慣用句について」『東京国際大学論叢』東京国際大学コミュニケーション学部編、創刊号：69-80.
- 長谷川信子 2007. 「1 人称の省略」長谷川信子（編）『日本語の主文現象』231-369. ひつじ書房
- 井上和子 1973. 「知覚動詞とその周辺」『英語文学世界』第 8 巻第 6 号、10-3, 21. 英潮社
- _____ 1977. 「日本語の論理性」『講座・日本語』月報 3 月、3-6. 岩波書店
- Inoue. Kazuko. 1998. “Sentences without nominative subjects in Japanese.” (ed.) K. Inoue, *Report (2): Researching and verifying on advanced theory of human language*, 1-29. Kanda University of International Studies.
- 井上和子 2007. 「日本語のモーダルの特徴再考」長谷川信子（編）『日本語の主文現象』227-260. ひつじ書房
- 久野暉 1973. 『日本文法研究』大修館書店

- Kuroda, S.-Y. 1972. "The Categorical and Thetic Judgments," *Foundations of Language* 9, 153-185.
- _____ 1988. "Whether we agree or not: a comparative syntax of English and Japanese," *Linguisticae Investigationes* 12, 1-47.
- 益岡隆志 2000.『日本語文法の諸相』くろしお出版
- Miyagawa, Shigeru. 2001. "EPP, scrambling, and wh-in-situ." (ed.) Michael Kenstowicz, *Ken Hale: A Life in Language*, 293-338. MIT Press.
- Miyagawa, Shigeru. 2005. "On the EPP." (eds.) Martha McGinnis and Norvin Richards, *Perspectives on Phases, MIT Working Papers in Linguistics*.
- Rizzi, Luigi. 1997. "The fine structure of the left periphery." (ed.) Liliane Haegeman, *Elements of grammar*, 281-338. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- _____ 2004. "Locality and left periphery." (ed.) Adriana Belletti, *Structures and Beyond: Cartography of Syntactic Structures volume 3*, 104-131. New York: Oxford University Press.
- Ueda, Yukiko. 2002. *Subject Positions, Ditransitives, and Scope in Minimalist Syntax: A Phase-based Approach*. Ph.D. dissertation. Kanda University of International Studies.

261-0014

千葉県千葉市美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学

言語科学研究センター

inoue@kanda.kuis.ac.jp